

## 外来生物アライグマ (*Procyon lotor*) がトウキョウサンショウウオ (*Hynobius tokyoensis*) 等に与える影響

(金田正人氏の論文を事務局が要約)

### 1 神奈川県におけるトウキョウサンショウウオの生息状況

トウキョウサンショウウオ (*Hynobius tokyoensis*)

サンショウウオ科 (Hynobiidae) カスミサンショウウオ属 (*Hynobius*)

- ・ 群馬県を除く関東地方の1都5県と、福島県および愛知県に分布
- ・ 神奈川県では三浦半島の横須賀市と葉山町だけに自然生息分布
- ・ 早春の産卵期に、溜池や水田、用水路や水たまりの止水域や、水路や沢等の緩流水域を訪れて産卵する。幼生期を水中で過ごし、変態後は上陸して周辺の雑木林の林床などに潜んで生息する
- ・ 水田と斜面林によって構成される「谷戸環境」は良好な生息場所だが、耕作放棄による水田や用水の乾燥化、大規模開発によって、生息域は減少している
- ・ 1997年の三浦半島全域での調査によって確認された生息地は14箇所、産卵卵嚢数は合計1036
- ・ 環境庁のレッドリストで東京都の個体群が絶滅のおそれのある地域個体群(LP)
- ・ 神奈川県のレッドリストで危惧種D
- ・ IUCNのレッドリストでVU B1ab(iii)

### 2. 三浦半島のアライグマの野生化の状況

1990年 鎌倉市扇ヶ谷1丁目にて繁殖確認

1992年 三浦市初声元屋敷下にて生息確認(三浦半島初)

1996年 横須賀市子安でアライグマの足痕を確認

1997年 葉山町上山口、横須賀市芦名、野比で足跡を確認

三浦半島では1996年には定着が確実であり、その後に急激に分布が拡大したと思われる。  
2005年12月現在では、城ヶ島や猿島などの島々を除き三浦半島全域に生息している。

### 3. アライグマによる三浦半島の生態系への影響

#### (1) トウキョウサンショウウオ

捕食確認例

a) 2001年3月20日 横須賀市野比において頭部を破損した死体1個体を観察

(タヌキも成体の一部を食いちぎることから、アライグマが捕食した確実な観察例とは断定できない。)

b) 2003年3月8日 葉山町上山口寺前において、

- ・ 体の前部を食いちぎられた雄成体の1死体を観察 (Fig.2)
- ・ 5卵囊の卵があったが、2卵囊はエッグサックが破られており1卵囊は紛失し確認できなかった(通常1回の産卵によって2卵囊産卵される)
- ・ 周囲の湿地には、アライグマの新しい足跡が無数にあった
- ・ 当地に生息するタヌキ、ノネコ、イタチの足跡は見つからなかった

c)2003年 横須賀市野比において被食死体5個体 + アライグマの足跡

d)2004年 横須賀市野比において被食個体1個体 + アライグマの足跡

e)2004年 葉山町上山口栗坪で被食死体4個体

f)2004年 上山口, 下山口, 横須賀市衣笠で破られた卵囊 + アライグマの足跡

#### 自動撮影装置による撮影

場所: 葉山町上山口寺前の産卵池

装置: 赤外線自動撮影装置 (有アーパス製FieldNotell)

期間: 2003.12.19 ~ 2006.3. (現在継続中)

結果: のべ116日37分で、68例7種の捕食動物が撮影された。

そのうち56例(82.4%)はアライグマであった (Fig.3)。他に、フクロウ4例、ノスリ3例、タヌキ2例、ノネコ・トビ・カラスが各1例あった(例数の数え方は、装置の前に動物が長く滞在し連続して複数回シャッターが落ちてても、同じ1例に含めた)。

2004年4月11日に、当地で4卵囊の産卵が観察され、4月17日には2卵囊のエッグサックが破られ、卵が流出していた。4月11日から17日の間に自動撮影装置によって撮影されていたのはアライグマのみである。

横須賀市野比は、三浦半島の中でトウキョウサンショウウオの産卵数が多い地域であり、大幅な環境変化が認められていないにも関わらず、2000年以降、観察されている産卵数が激減している (Table.1, Fig.4)。

北海道では、トウキョウサンショウウオに類似したエゾサンショウウオ (*Hynobius retardatus*) が生息しているが、アライグマに捕食されたとの報告がある。アライグマの原産地北米でも、サンショウウオ類をアライグマが捕食している。

以上より、三浦半島に生息するトウキョウサンショウウオが、アライグマの捕食によって生息数の激減または地域的絶滅に追いやられるような影響をうけていると考えられる。

#### (2) カエル類

アズマヒキガエル (*Bufo japonicus*)

2000年に逗子市久木の岩殿寺においてアライグマによる捕食を目撃したという聞き取り情報があり、その後ヒキガエルの減少が観察された。

アライグマの原産国では、ヒキガエル属の *B. alvarius* や *B. americanus* が捕食されている。

#### ヤマアカガエル (*Rana ornatibventris*)

本種は葉山町長柄鬼が作谷戸に多く生息している。当地でアライグマの侵入が認められたのは1996年で、以降、継続的に生息が確認され、当地でのアライグマの生息数は比較的多いと考えられる。

鬼が作谷戸は、1993～1994年に1年間休耕したが、'95以降、今日まで市民NGOによって水辺の維持管理がなされている。また、集水域中に人工建造物は認められず、'95年以降、大幅な環境改変は認められていない場所である。それにも関わらず、近年、ヤマアカガエルの産卵数は減少傾向にある。Table.2, Fig.5にヤマアカガエルの産卵卵塊数の経年変化について示す。

さらに、2005年春にヤマアカガエルが上山口寺前の水田で、体の一部分を被食された30個体以上の死体と周囲に無数のアライグマの足跡が観察されている。

北海道では、ヤマアカガエルに類似したエゾアカガエル (*Rana pirica*) がアライグマに捕食されている。原産地でも、アカガエル属のキタヒョウガエル Leopard frog (*R. pipiens*) やカナダアカガエル Wood frog (*R. sylvatica*)、その他にもアマガエル属 (*Hyla* sp.) やその他のカエルが捕食されている。

以上より、ヤマアカガエルについても、アライグマの捕食により、個体数の激減などの影響がある可能性が高いと考えられる。